

追い風、
向かい風

SPECIAL INTERVIEW

先生には

「大丈夫」って言ってほしい。

重松清

KIYOSHI SHIGEMATSU

作家

少年時代に読んだのは漫画や
時刻表、そして国語の教科書

父が転勤族だったので、小学校時代は基本的に転校生。いつも途中からクラスの輪に入っていき「よそ者」だったから、「自分とは何であるか？」を周囲に分かってもらえないといけない。同時に、周囲のことを知っていく必要もある。そういう意味で社交性はあったほうだと思います。でも、どこかで「どうせ俺は来ないし」という思いもあって、少し冷めたところもあったかもしれません。

子どものころから、文学的なものに限らず、読むことは好きでした。漫画雑誌を買うと、漫画も読むけど欄外の1行情報まで読んだものです。時刻表は、読むだけでは飽き足らず、実在しない路線の時刻表を想像でつくり、実在する路線との乗り継ぎ時刻まで考えたりして笑。国語の教科書は、もらったその日に読了。僕は、教科書で読んだ作品を意外と覚えているんです。パッと思い出すだけでも、『少年の日の思い出』（ヘルマン・ヘッセ/著）、『白いぼうし』（あまきみこ/著）、『少年駅伝夫』（鈴木三重吉/著）なんかがある。内容のみならず、『一切れのパン』（F＝ムンテヤーヌ/著）（※）を読んだときに、「希望ってそういうものなんだな」と思ったことまでよく覚えています。（※）第二次世界大戦中、捕虜となった男が脱走する際に、ユダヤ人からハンカチに包まれた一切れのパンを渡され、それを心のよりどころにしながら飢えや恐怖に耐え忍び、苦境を脱した後には包みを開けるとそれはパンではなく木片だったことを知る話。

先生と生徒は
一生、先生と生徒

転校が多かったこと、また、吃音でうまく喋れなかったこと

もあり、多くの先生たちにお世話になりました。中でも、小5の担任だった松本先生（男性）は特別な存在です。戦前を知る世代ならではの厳しい先生だったけれど、僕はその先生のことを大好きでした。次の学校に転校してからも年賀状でつながりを持ち続け、大学時代には一緒にお酒を飲んだり、作家になってからも自分の小説を送ったりしていたんです。そんなある日、三重県にある老人ホームから電話が入り、聞けば松本先生が僕に会いたがっている。それで、その施設を訪ねたんです。認知症が進んでいたのですが、昔の話をすることは脳の活性化にいいと聞き、思い出話を花を咲かせました。すると先生が施設の職員さんに「こいつと一緒に釣りをしたときにさ」とか、「こいつは修学旅行でね」なんて、うれしそうに話すわけです。でも僕は松本先生と釣りなんてしたことないし、6年生時代は別の学校だから修学旅行の記憶は僕ではない笑。先生の中で、僕は教え子の代表みたいになっているようでした。そのときに「先生と生徒って、一生、先生と生徒なんだな」って、しみじみと感じましたね。

僕が前を向けたのは、先生が
「大丈夫」と言ってくれたから

『教育とはなんだ』（ちくま文庫）を書くために、僕が教育現場のさまざまな人たちにインタビューをさせていただいてから、約17年が経ち、教育界も様変わりしました。それこそ、新型コロナによって始まったオンライン授業などは、キャリアの長短に関係なく、先生全員がいきなり同じスタートラインに立たされ、手探りで始まったわけです。僕も2016年から早稲田大学で教えていますから、新型コロナのせいでトラ

イアンドエラーを重ねている一人。それでも失敗を恐れずにチャレンジするしかないんです。でも、それと同時に思うことは、子どもにとっての『1年の空白』による痛みは、僕たち大人にとってのそれとは比べ物にならないくらい大きいということ。その空白を埋める方法は、僕も軽々には言えないけれど、せめて卒業式ができなかった学年のことはずっと忘れずにいてあげてほしいなって、そう思います。先生はいつも完璧を求められて大変です。そもそも常に完璧であることなんて無理です。それでも、完璧を目指すことを諦めてはいけなと思うんです。これは自分を含め、教育に関わるすべての人たちが心に留めておくべきことだと僕は思っています。

新型コロナで閉塞感が漂うこんな時代だからこそ、子どもたちが前を向けるよう、先生たちには楽観的であってほしいなと思います。と言うのも、僕の経験からなのですが、高校2年生のときにいろんなことが重なり、親も本気で僕を心配するくらい、とてもしんどかった時期があるんです。そのとき、豊岡先生という担任の先生が、うちの親に「重松は大丈夫ですよ」と言ってくださって、その言葉が僕はすごくうれしかった。先生という仕事は、子どもが知らないことを教えることが一番の仕事ではあるけれど、子どもが下を向いているときに「大丈夫」と言って、子どもが前を向けるようにすることも同じくらい大切なことだと思うし、実際にそれができる存在なのではないでしょうか。

いろんな先生がいろんな価値観を
示してくれるといい

僕は「指導者」と「教育者」は別だと思うんです。例えば「おいしい目玉焼きを作る」という目標を持っている子どもがいた

とします。指導者とは、その子が目標を達成できるように、知識やスキルを与え、導いてくれる人。一方、教育者とは「正解」を増やしてくれる人。つまり「目玉焼きが失敗したら、スクランブルエッグにしちゃえばいいんだよ」と教えてくれる人。両方とも重要ですから、学校には両方の先生がいてくれるといいですよ。担任が指導者なら、保健室の先生や司書の先生が教育者って感じで、いろんな先生がいろんな価値観を示してくれると子どもたちは幸せだろうなって思います。とは言え、求められるものが多すぎると、先生だってしんどくなって当然。このインタビュー記事のコーナータイトルが『追い風、向かい風』になっていますが、しんどい風が吹いているときは、風待ち港に行って休めばいい。休める入り江をたくさん持っているのが大人なのですから。

僕が書く小説は、爆発的な売れ方はしていないけれど、賞味期限の長さには自信があるんです。来春、全国劇場公開になる『とんび』も、時代設定は昭和37年から平成くらいまで。書いたのは平成14年で、これまでに2回テレビドラマ化されました。その作品が、令和の時代に映画で蘇ると思うと、本当に大事なものは、時代が変化しても変わらないんだなって思いますよね。一緒にすると叱られそうですが笑、これからも夏目漱石や宮沢賢治の作品のように、ずっと読み継がれる作品をつくっていきたいです。



重松清さん
とっておきの手土産をプレゼント!

プレゼントクイズ(P32) 正解者の中から抽選で2名様に、ローズメイの「オレンジスライスジャム」をプレゼントします。ふるって応募ください!

わたしの『ダイスキ!』

「Tivoli Audioのラジオ」



仕事ですと文字と向き合っていると、人の声が恋しくなることがあって、そういうときにラジオをかけるんです。古いラジオなのですが、あたたかい音が魅力。あと、僕は高校時代、山口県に住んでいたため、『オールナイトニッポン』を聴きたくても電波が入らず思うように聴けなかった。夜になるとラジオを持って窓際に立ち、電波を捉えようと必死でした笑。そういう意味で、ラジオ番組そのものへの憧れが強かったというのもあるんでしょうね。

重松・清 | しげまつ・きよし |

1963年、岡山県生まれ。早稲田大学教育学部を卒業後、出版社勤務を経て、執筆活動に入る。91年『ビフォア・ラン』（ベストセラーズ）で作家デビュー。99年『ナイフ』（新潮社）で坪田譲治文学賞を、『エイジ』（朝日新聞社）で山本周五郎賞を受賞。2001年『ビタミンF』（新潮社）で直木賞、10年『十字架』で吉川英治文学賞、14年『セツメツ少年』で毎日出版文化賞を受賞。小説以外にルポルタージュや時評、評論なども執筆。『流星ワゴン』『ステップ』『泣くな赤鬼』など、映像化された作品も多数。『とんび』は2度のテレビドラマ化を経て、2022年に阿部寛×北村匠海の共演で全国劇場公開予定。